

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きをえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 ^{こく ま じゆつ} 黒魔術の女

昭和49年8月15日 初版発行

著者 ^{もり} 森 ^{むら} 村 ^{せい} 誠 ^{いち} 一

神奈川県厚木市緑ヶ丘4-3-141

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 堀内 文 治 郎

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Seiiti Morimura 1974

(分)0-2-93(製)02253(出)2271(0)

Printed in Japan

こく ま じゅつ おんな
黒魔術の女

「闇の奥に火が見える」改題

もり むら せい いち
森村誠一



カッパ・ノベルス

目次

闇 やみ の悪夢	5	密閉 やみ された山莊	93
危険なプレイ	9	密教の集会	130
針の軌跡	31	殺意の連繫 れんけい	145
祝婚 うけい の影	43	もののけの宴 うたげ	171
新婚の玩具 おもちゃ	52	貞操の張り込み	187
処女 なご の名残り	67	三点の独立	200
よみがえる火の山	83	造 つく られた楔 くさび	215

イラストレーション

進藤 信一

闇の悪夢

1

中道鴛子には、奇妙な記憶がある。それは彼女がもの心つくかつかないかのころのことらしい。それが現実にあったのかどうかすらいまとなつてはさだかではない。とにかく幼いころに目撃した一つの異常なシーンが、免疫性のまったくない白地の心に焼きつけられて、年月とともに遠くなつた記憶の底に、鑄型となつて固定されているようである。

あるいは、それは成長の過程に、最初のオリジナルな記憶が歪められたまま定着したものかもしれない。

それは、夜更けの深山の森の奥であつた。森の中央にある広場の真ん中で、盛大な焚火がたかれている。焚火を囲んで数十人の男女が手をつないで円陣をつくつてい

る。みな一様に、黒いマントのようなものを着ていた。

鴛子は、最初その森の奥へ両親に手を引かれて行ったような気がする。恐がる彼女をなだめすかして、父母は鴛子を森の奥へ引つ張りこんで行つた。

焚火の前に白布をかけた祭壇がしつらえられてある。

祭壇のまわりに白い線で円がかかれている。円の外側には、百目ろうそくが何本も置かれてある。さらにその外側に黒いマントをまとつた数十人の人間が、背後の森の闇に同化したようにたたずんでいる。焚火の炎とともに、黒衣の人影が闇の奥に揺れる影をつくる。まるでもののけの集いのように、闇に黒い影が踊る。

祭壇の上には、なにやら妖しい香りをたてる香炉や剣やら、得体の知れない道具が置かれてある。祭壇の前には、鉤のような角の生えたかぶとをかぶつた白衣の人が、妖しげな呪文を唱えている。

呪文につづいて、円陣の黒衣の群れがいつせいに唱和する。恐がつて、ペソをかいている彼女に、ふだん優しい両親が、人が変わったように恐い顔をして、

「今夜からおまえは、魔女になる。こんなことでおびえてはならない」と叱つた。両親はいやがる鴛子から着物

を剥ぎ取った。そして、白衣の人に彼女を預けると、まわりの黒衣の群れの中へ戻って行つた。両親も、黒衣をつけていたので、たちまち見分けがつかなくなる。

白衣の人は、鴛子に目隠しを施した。

白衣の人は、祭壇の前に歩み寄ると、また新たな呪文を唱えはじめた。恐怖に凍んで、泣くことも忘れた彼女のまわりで、いっせいに呪文が唱えられ、人の動きが空気のゆらめきとなって伝わってくる。

「エコ、エコ、ザラワク、エコ、エコ、サワラク、エコ、エコ、エコ」

地の底から湧き上がるような無気味な呪文が、鴛子を取り巻いて、しだいに波の近づくように高くなっていく。急に目隠しが外された。白衣の人間が長剣の切っ先を自分に向かつて構え、その背後に円陣をつくった黒衣が、あやかしの輪舞を踊っていた。鴛子は子供心に、自分が生け贄に供されたのだとおもった。彼らの頭上で森の梢が、風に揺れてざわざわと騒いでいる。焚火の炎の赤さが、耳まで裂けた悪魔の口のように見えた。

剣を構えた白衣の人が近づいて来て、鴛子の唇に生暖かい唇を押しつけた。と同時にそれらの音や光景がふい

と遠ざかって、鴛子は、暗黒の失神の中に落ちこんだのである。

失神から醒めたときは、彼女はふたたび優しい両親にはさまれていたような気がする。それは、朝、目覚めるとき枕の上から覗く、優しい母の顔であり、時折り膝の上に抱き上げて、ひげで痛い頬をじゃりじゃりと押しつけてくる煙草臭い父であった。

暗い森の奥で、怪しい黒衣をまとって、鴛子を祭壇の前の生け贄に供えようとした恐ろしい父母ではなかった。「あれはきつと悪い夢を見たのだわ」と彼女は自分に言い聞かせた。夢の記憶を両親に確かめるのが、なんとなく憚られた。彼らにそれを聞くと、あの恐ろしい悪夢が現実のことになるような気がした。

両親も、その夢につながりのあるようなことをいっさひ話さない。

「やっぱり夢だったんだわ」

もし夢でなければ、両親がそれについてなにかほめかすはずだとおもった。

だが夢にしては、そのときの光景が具体的な形となつて、記憶の底辺に定着していた。年月の経過による忘却

と、新たな体験の堆積が幾重ものかさぶたとなって被い、夢か現実か見きわめのつかぬまま、いつしか蔵いなくした品物のように、心のどこかに埋もれてしまった。

2

それがふたたび掘りおこされたのは、一冊の本によってである。

読書好きの彼女は、閑さえあれば、本屋へ入る。待ち合わせにも本屋を利用する。ここだと、相手が多少遅れて来ても、少しもいらいらしない。立ち読みに熱が入りすぎて、相手が来たのも知らず読み耽り、とうとう相手のほうがすっぱかされたとおもって帰ってしまったというエピソードさえあるくらいである。

大学三年の夏休みに入る少し前、夏休み中に読む本を物色するつもりで、立ち寄った一軒の書店で、ふと一冊の本が鴿子の注意を惹いた。黒い表紙の全書判程度の小型本であった。『魔女と黒魔術』と題してある。黒い装幀と、表紙に描かれた魔女の半身が、なにやら彼女の悪夢のイメージに似ていたからである。

ばらばらとページを繰った彼女の目が、本の一つ所に釘づけになった。そこには、

「エコ、エコ、アザラク、エコ、エコ、ザメラク、エコ、エコ」と祈禱の文句が記されていた。それこそ、彼女が夢の中で聞いた、白衣の人物の指揮によって、黒衣の群れがいっせいに唱和した呪文に酷似しているではないか。鴿子がおぼえているのは、「エコ、エコ、エコ、ザラワク、エコ、エコ、サワラク」である。

「もしかしたら、幼い耳がまちがって記憶したのかもしれないわ」

呪文だけでなく、そこに記述されている妖術の儀式は、彼女の夢の記憶に、あまりにも似通っていた。その本の、——組んだ四脚に板をのせて、白布をかけた祭壇と、それを囲むように、床の上にチョークかテープで描いた直径九フィートの「聖なる円」があり、そのすぐ外側には東西南北の方位をしめす四本のろうそくが置かれている。祭壇の上には香炉、むち、小刀、銅製の星型、長剣、塩と水の容器がのっている——とある記述も、彼女の記憶にそっくりであった。

さらに、司式の司祭は、白衣をまとい、左右に角の生

えた青銅のヘルメットをかぶり、有角神、または狩獵の神を象徴している。

鴿子は、立ち読みをつづけるうちに、本の中に完全に吸いこまれた。その妖術の儀式は、古い魔神——偉大なる母神や有角神を賛美する集会である。集会祝福、礼式舞踊、新会員の入門式、神への請願の四部に分かれており、鴿子の記憶にあるものは、その中の入門式に該当するものであった。

最後に白衣の司祭が剣の切っ先を胸に突きつけたのは、宗門への服従を命にかけて誓わされたことになる。この後、唇、胸、性器、膝、脚に五重の接吻をして、新しい魔女が誕生するという。

「私は、魔女にさせられたのかしら？」

心の底に埋もれていた古い記憶がよみがえった。都心の書店の一角においていた古い記憶がよみがえった。都心の中央に立っているような気がした。火の粉を散らして燃え上がる盛大な焚火、そのまわりに円陣をつくって踊り狂う黒衣の影、長剣を胸元に突きつけた白衣の司祭、

「エコ、エコ、アザラク」の呪文。背筋が寒くなった。

ハッと我に返った鴿子は、本を買って書店を出た。

家に帰ってから改めて、その本を読み返すと、実によく自分の夢の記憶に符合している。記憶の曖昧な部分も、その本が補足してくれた。

「やはり、あのことは、現実にあったのだろうか？」

夢にしては、デテールがあまりにも似ているのである。そしてもし事実あったことだとすれば、両親も、妖術の儀式に出たことになる。

まさかとおもった。彼女の父の中道逸郎^{いっろう}は、妖術などという非科学的なものを最も軽蔑するタイプの経営者である。自分と家族だけでなく、大勢の社員の生活がかかっている会社を順調に維持発展させるために、自分の能力のすべてを傾けている。父が信ずるものと言えば、経営の実数と、科学的なデータだけであろう。

母も、結婚する前に、司法試験に合格し、弁護士になれる資格をもっているインテリ女性である。その彼らがこともあらうに、魔神崇拜の魔女集会などに。——しかも彼らは自分の娘に、魔女にするための黒ミサを受けさせたことになる。

とても信じられなかった。だが本の記述は、ごまかしようのない符合をしめしている。この妖術を信ずる魔女

集団は、世界に数千万人の会員をもっているということである。

「父と母も、魔女集団のメンバーなのだろうか？」

「ばかばかしいことと否定しながらも、胸の奥で疑惑が脹れ上がってくるのを防げなかった。鴿子には、両親がその会員になるかもしれない一つの心当たりがあったのである。」

危険なプレイ

1

折りから降り出した雨が、三人の男たちに幸いした。

週末の午後の雨、それは彼らの目的にとって、最適の条件となる。紳士風の彼らの服装やものごと、山際の操るデラックスタイプの車に惑わされて、声をかけられた女たちは、ほとんど疑いをもたずに乗りこんできた。

百発百中に近い確率に、むしろ彼らのほうが女を選んだ。どんな女でもいいというわけにはいかない。まず、彼らの食欲をそそる魅力を身体に蓄えた女でなければならぬ。次に安全ということが、条件となる。目的を果たした後で、訴え出られたら、元も子もない。三人の中の二人には縁談が進行中である。独身時代の掉尾を飾るようなつもりで、このハンティングをしている。

だが、安全性に関しては、絶対の保証を取り付けられない。女の態度や服装などから判断して、誘うわけだが、そこに多少の危険を冒すのを避けられない。またこの危険性が、彼らの発明した「遊び」を最高にスリルあるものしてくれるのだ。

最初から安全確実とわかっていたら、遊びの妙味は、失われてしまう。多少、危険な橋を渡ってこそ、手に入れた獲物の肉の美味さが倍加するのである。いままでのところ仕留めた獲物から、反撃を食ったことはない。その肉の最も美味な部分を、三人におもいうさま食い散らかされて、泣き寝入りしている。

彼らは、完全な成功率に氣をよくして、しだいに大胆になっていった。女の見合いについても、自信がついてきた。これまで彼らが狙いを付けた獲物は、たいてい獲物のほうから食べられたがっていた。最初若干の抵抗を見せて、貪^{むさぼ}られはじめると、官能の欲びに自分自身が陶醉してしまう。むしろハンターの彼らのほうが興奮^{どんらん}めし

てしまうほど、女の貪婪^{どんらん}な一面を見せつける者さえいた。最近、彼らの遊びは、単に飢餓感を充たすためだけのものから變形して、変化応用^{バリエーション}の遊びを愉^{たの}しむようになって

ていた。今夜、二人の女性を同時にハントしたのも、最近「開発」したバリエーションを試みるためである。

最初の試みは、開発者の彼ら自身が驚くほどの成功を収めた。一人は女子大生で、一人はOL風であった。人気がない野原に連れ出して犯そうとすると、女子大生は、猛烈に抵抗した。ところがもう一人のOLが、相当のすれっからして、進んで身体を開きながら、ここまできて往生^{せいじやう}きが悪いと、女子大生を叱ったのである。奇妙な変化が起きた。女子大生は、OLに挑戦するように、自分から男に對^{むか}ってきた。二人の女の間に奇妙な競争意識が働いて、おかげで男たちは、同時に常よりも二倍の美味を獲物のほうから供された形で、味わえたのである。彼らは、これに味をしめた。それ以後、複数の獲物を同時にハントすることにした。『複数ハント』は、獲物同士が仲間がいるのに安心して容易に罠^{わな}にかかりやすいメリットもあった。

2

「あの二人を狙え」

尾賀と海原が同時に言った。

「急いでいるらしい」

ハンドルを握っていた山際が、にんまりと笑った。

駅前のタクシー乗り場から少し離れた通りの端に立つて、彼女らはしきりに空車を物色している。一人はパリの白っぽいレインコート、手に紙包みを下げている。他の一人はうすいピンクのワンピースをまとっている。

いずれも夜目にもはっとするほどに、はつきりした目鼻立ちをしている。レインコートが丸顔で、ワンピースがやや細面である。

折りから降りだした雨のせいもあって、駅前のタクシー乗り場は、長蛇の列である。しかもそこへ空車はほとんど寄って行かない。そんな列の後ろに並んでも、いつ車にありつけるかわからない。暮れるに早い秋の空は、雨雲に被われて、すでに夜の気配が濃厚であった。彼女らは、急いでいるらしく、乗り場から少し離れた通りのほうへ進出して、強引に空車を停めようとしていた。急いでいる女を狙うのは、この種のハントの最もオーソドックスな手口である。彼女らの前に、山際はすっと車を寄せて行った。

「お嬢さん、よろしかったら、いかがですか」

尾賀がドアを開けながら、すかさず声をかけた。このときの呼吸が難しい。少しでもこちらに忸怩たるものやテレがあると、女を警戒させてしまう。

悪びれず、堂々と声をかける。せっかくの親切を断わるのが悪いような心理状態に相手を追いこんでしまうのである。

「さあ、どうぞ、どちらへもお送りしますよ。濡れますから、早く乗ってください」

尾賀は、相手に判断する隙をあたえないようにうながした。最初、ちらりと女の面に走った警戒の色は、三人の男たちのしっかりした服装と、紳士的なものごしを認めて、消えたが、まだためらいの気配が揺れていた。

「どちらへ行かれるのですか。こちらは急いでいませんから、お送りいたします。こんな所でいつまで待っていても、車は拾えやしませんよ」

運転席から、振り返りもせずと言った山際の言葉が、彼女らのためらいに終止符を打ったらしい。

「どうでしょう？」

細面が、丸顔のほうへ相談するように言った。

「乗せていただきましょうか？」

丸顔のほうもだいぶ乗り気になっている。このような場合、女が一人きりだと、本能的な警戒が先に立ってなかなかこちらの誘いに乗ってこないものである。だが、たがいに仲間がいるという意識が、彼女らを大胆にしていた。

「蓮田まで乗せていただけませんか？」

丸顔のほうも遠慮がちに言った。

「ちようどよかった。我々もそちらの方向へ帰るところでした」

山際が、すかさず言った。海原が助手台に移って、拾った二人の女性を後部座席にすわらせた。それとなく観察すると、丸顔のほうも、年齢もやや上らしく、身体の線が熟れている。態度にも年齢相応のなれなれしいところがある。

「処女ではあるまい」と山際は、内心おもった。そのほうが料理しやすい。それに対して細面のほうは、生硬な感じがある。丸顔に釣られて乗りこんで来たものの、まだ警戒を完全に解いていない様子だった。

だがいったん男を受け容れた後は、速やかに開発され

て、成熟の味を出しそうな上等の素質を感じさせる身体の輪郭をもっている。身体は、十分に用意がととのっているにもかかわらず、まだ一度も男を迎え入れていないことから発する硬さである。最初、ちよつとした抵抗にあうかもしれないが、力にまかせて踏み躪つてしまえば、おとなしくなる。

山際は、獲物の値踏みをしながら、

「蓮田のどちらですか？」

「旭ガ丘です」

旭ガ丘は蓮田の町から二キロほど離れた高台にある新設の団地である。

「お二人とも、旭ガ丘にお住まいですか？」

見知らぬ車に便乗してやかたくなっている二人の女に、今度は尾賀が如才なく声をかけた。

「いいえ、知人が旭ガ丘に住んでおりますの」

丸顔が答えた。

「あすこは、なかなか大きな団地ですねえ」

土地カンがあるらしい海原が言った。

「ええ、でも交通の便が悪くて苦勞します。バスの回数は少ないし、タクシーは質が悪くて。雨でも降ると、二

倍出さないと行ってくれないんです」

「このタクシーの柄の悪いのは、有名ですからね」

彼らは、タクシーよりも危険な正体を、まだ隠している。この駅前が絶好の獵場であるのも、タクシーの質の悪さにかなり助けられているのだ。

「それで私たちも、一人で乗るのが恐いものですから、同じ団地へ行くとわかったので、いっしょに車をつかまえようとしていたのです。助かりましたわ」

どんな危険な罠の中に落ちこんだのかも知らず、彼女は素直に謝意を表わした。

「お二人は、いっしょではなかったのですか？」

「電車の座席が隣り合ったんです。車待ちの行列にもいっしょに並んだのですけれど、いつ車が来るのかわからないので、とうとう待ちきれなくなつて」

「だいぶお急ぎのご様子でしたね」

「人を待たせておりますので」

「ああ、あなたのような女性を待っている人が羨ましい」
「まあ」

尾賀は、適度に女の心をくすぐった。軽妙な話しぶりで相手を会話に引きずりこんでいる間に、車はどんどん

距離を稼いでいる。

「そちらのお嬢さんは、旭ガ丘にお住まいですか？」

海原も、細面の女性に話しかけた。

「いいえ、私も知っている方に……」

「そう言えば、今夜は土曜日でしたなあ」

すでに車窓の外はとつぷりと暮れていた。町並みを出たと見えて、灯の密度が、ぐんと薄くなった。

「あら、方角がちがうんじゃないやありません？」

最初に不審をもったのは、丸顔のほうである。彼女のほうが土地カンが強いらしい。車が灯の疎らな方角へ向かつて行くのに、不安をおぼえた様子である。

「旭ガ丘でしょう。こちらのほうが近道なんですよ」

海原が、なだめるように言った。

「でも……」

細面の女性が遠慮がちな口調で、

「以前に何回か来たとき、タクシーは、この道を通らなかつたわ」

「その運転手は、この辺の地理に不案内だったんでしよう」

尾賀がこともなげに言った。そのまま女たちは沈黙し

で、その間に車はまた、距離を稼いだ。

「おかしいわ。駅からもう三十分も来ているわ。いつもこんなにかからないのよ」

丸顔が、腕時計をすかして、たまりかねたように言った。

「私、ここでけっこうですから、降ろしていただきますわ」

細面が、不安をはっきりと顔に表わして言った。

「こんな所で降りたら、危険ですよ」

山際は、どこを風が吹くといった表情で、車を走らせつづけている。車はいつの間にか人家の灯から離れた寂しい野面の道を走っていた。

対向車と後続車のライトも見えない。塗りこめられたような暗い闇の奥に、二つ三つ遠い灯が心細げにまたたいている寂しい場所であった。

もう女たちには、車がどの辺を走っているのか、まったく見当がつかない。雨脚はいちだんと激しくなったようである。

「あなたたち」

丸顔の女が、急に強い声をだした。

「あなたたち、変な下心もってるんじゃないでしょうね」

「下心なんかもっていませんよ」

山際がしごく生^きまじめな口調で答えた。あまりに生まじめすぎて、逆に底意が感じられる。

「停めて！ 停めてよ。さもないと警察を呼ぶわよ」

丸顔のほうは、かなり激しい気性と見えて、いきなりドアを開けようとした。

「もういいだろう」

山際が言うと同時に、尾賀と海原が女に襲いかかった。「あつ、何をするの！」

愕然として抵抗をしようとしたときは、すでに遅かった。丸顔は尾賀に、細面は海原によって、羽交^{はが}い締めにされていた。あらかじめ用意しておいたらしいガムテープで猿轡^{さるも}をかませる。車内の鬭争は、たちまち終わった。その間に車は、最も闇のたまりの深い場所に滑りこんでいた。沼でもあるのか、闇の中に鈍い水面の光のようなものが見える。彼らは、そのようなことに馴れているらしく、動きに、まったく無駄がなかった。車が停まったときは、二人の女はすでに後ろ手に縛られて、無抵



此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertor.com